

---

**キラキラと輝く。**

はなちょこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キラキラと輝く。

### 【NZコード】

NZ569M

### 【作者名】

はなちょー

### 【あらすじ】

主人公、高水梓乃是高校一年生。

クラスのある男子に告白されたことがキッカケで、彼女の高校生活は大きく変わっていく。

「高水さん」  
たかみ

そう呼ばれて振り返ると。  
一人の男子が立っていた。  
彼は同じクラスの鈴木君だ。  
「ちょっと話があるんだけど・・・」  
緊張した面持ちで彼はそう言った。

校舎の裏。

私と鈴木君は向かい合つて立っていた。  
しばらくの沈黙の後。

彼は勢いをつけるかのように少し声を大きくして言つた。  
「俺、ずっと高水さんのこと好きだつたんだ」

私は驚いて鈴木君を見た。

鈴木君は・・・・・。

次の日。

コリやミコキは私のことを無視した。  
挨拶をしても聞こえていないフリ。

お弁当を食べようと言つても仲間には入れてくれなかつた。  
まるで私はそこにいないかのように。

「なんで無視するかつて？ 私達が悪いみたいに言わないでよねー！」

放課後。

一人に「なぜ突然私を無視するのか」と問いただすと、返つてき  
た答えはそれだつた。

ミコキは私を睨みながら続ける。

「鈴木君に告白されて調子に乗つてんじゃないわよ」

「別に調子に乗つてなんか……それに理由は断つたし……

・・・

「ヒディ……私が鈴木君のこと好きだつてこと知つてたくせに」

ユリは今にも泣きそうな声でそう言った。

「もう梓乃(シノ)なんて絶交だから」

ミコキはそれだけ言うとユリと一緒に教室を出て行ってしまった。

私は鈴木君のことは何とも思つていなかつた。

特別、仲が良かつたわけでもない。

私の彼の認識は「ユリの好きな人」だつた。

ただそれだけ。

誘惑したわけでもアタックしたわけでもない。

彼はなぜか私に告白してきたのだ。

それなのに。

なんで私は友達を失わなければならないのだろう……。

それから数日間。

めげずに一人に話しかけてみたが無視されるだけだつた。

楽しいはずの高校生活は一変した。

一人ぼっちでいることが多くなつた。

「静かだな・・・・・・」

私はそう呟いて目の前の景色を見た。

まるで模型のような街並み。

空は雲一つない青空。

頬に当る風がやわらかい。

今日は一月とは思えないほど暖かい。

授業をサボつたのなんて初めてだ。

屋上へ来たのも初めてだった。

手に持っていた手帳を取り出した。

教室を出ると、なぜか手にしていたものだった。

ここにはコリとミコキと三人で撮ったプリクラが沢山ある。それから私がデジカメで撮った写真も何枚か挟んであった。もちろん、その中には二人で撮った写真もある。

「なんでこんな物、持つてきちゃったんだろう……」

私はそう呟いて手帳に視線を落とした。

その時だった。

「おい。授業中だぞ」

私は驚いて思わず手帳を地面に落としてしまった。

足元に写真が散らばる。

屋上に入ってきたのは担任の久我先生だった。

先生は私の前まで歩いてくると、しゃがみこんで足元に散らばった写真を拾い始めた。

私も慌てて自分の写真を拾い始める。

「なんだ高水だったのか。珍しいな、お前が授業サボるなんて」

先生はそう言うと一枚の写真を手にとった。

その写真をじっと見つめながらポツリとこう呟つた。

「綺麗な写真だな・・・・・」

それは。

春に撮った桜並木の写真だった。

自分でもお気に入りの一枚。

まさか誰かに褒めてもらえるなんて思わなかつた。

その瞬間。

ぱたりと地面に雪が一つ落ち、それが黒い染みになつた。

コップから水が溢れ出すかのように

涙が後から後から流れて地面の染みが増えていく。

なんでよりによつて担任の前で泣いちゃうんだろう。

バカだなあ・・・・・私・・・・・。

先生は慌てるでもなく困惑でもなく、いつも通りの口調でいつ  
言った。

「なにか悩みがあるなら先生に相談しろよ」

それだけ言うと先生は私に写真を渡して屋上のドアに向かって歩  
き出した。

「先生！」

気づいたら私はそう叫んでいた。

「くだらないな・・・・・・・

「え？」

思わず聞き返した。

私と先生は保健室に移動していた。

保健の先生は出かけているようで部屋には私と先生の一人だけ。  
思い切つてユリとミコキに無視をされていることを  
先生に打ち明けたら、彼の第一声はそれだったのだ。

「そりやあ無視されて落ち込んでいるのは、くだらないことかもし  
れませんが・・・・・・

私は俯いてそう言った。

「違う。高水のことじやない」

「え？」

「お前を無視してる一人のことだ。実にくだらない理由だ」

「でもユリは鈴木君が好きだったんですけど・・・・・・

「関係ないだろ。それはただの嫉妬だよ」

先生はそう言つと溜息をついた。

「それでもユリとミコキは高校に入つて初めてできた友達ですから・

・・・・・

「そんなくだらない理由で無視するのは友達じゃない」

「・・・・・はつきり言いますね。私一応、悩んでいる身なんですかけど」

「高校に入つて初めてできた友達つて言つても、まだ入学式から八ヶ月だる。あとまだ一年も高校生活は残つてる。だから本当の友達もできるよ」

私を見て先生が不思議そうな顔で尋ねてきた。

「・・・・・何を笑つてるんだ」

「散々はつきり言つた後でそんなフォローされても・・・・・」

私は笑いながらそう言つた。

「フォローのつもりはなかつたんだけどな」

先生がそこまで言い終わると同時に授業の終わりを告げるチャイムが鳴つた。

先生は立ち上がり私を見て言つた。

「思つたより元気そうで良かつたよ」

私は何も言うことができなかつた。

一瞬、先生がキラキラと輝いて見えたのは気のせいだらう。

先生に話を聞いてもらつたら随分と心が軽くなつた。  
だからとつて現状が変わるものではないけど

一人で過ごす休み時間も前より苦痛ではなくなつた。

数日後。

私は再び屋上にいた。

今日はサボりではなくお昼ご飯のためにここに来ていた。  
冬に屋上でお昼を食べる生徒なんて私くらいのようで、かえつて  
気楽に過ごせそうだ。

ガチャ。

屋上の重い扉が開いた。

濃いグレーのスーツを着た男性がこちらに歩いてくるのが見えた。

「元気か？」

久我先生は私の隣に来てそう言った。

「前よりは」

「そうか」

先生はそう言つと焼きそばパンを頬ばつた。

「寒くないか？」

「今日は暖かいですよ」

「そうか。さすが一〇代は違うな」

先生は少しだけ笑つた。

「先生、いくつなんですか？」

「三〇歳だ」

「見えませんね」

「それは老けて見えるつてことか？」

「いえ。若く見えるつて意味です」

「それはどうも」

先生はそう言つと缶コーヒーを開けた。

ブシュッという心地の良い音が静かな屋上に響いた。

「この前の写真、あれは高水が撮つたのか？」

「はい」

「お前、部活つてなにか入つてないだろ？」

「帰宅部ですね」

「それなら写真部に入らないか？」

「え？」

「顧問なんだよ、俺」

先生が私の顔を見た。

まだ。

また先生がキラキラと輝いて見える。

久我先生に言われたからではない。

顧問だから、とかそういう理由でもない。

これは私が決めたことだ。

「私は前から写真が好きだつたし」

そう呟いて目の前のドアを見た。

ドアには白い紙に油性ペンで「写真部」と書かれた張り紙が貼ら  
れてあつた。

「邪魔」

背後から聞こえた言葉に私は驚いてさつとドアの前から離れた。

小柄な女子が私の横を通り過ぎてドアに手をかけた。

一旦、手をとめて、こちらを見た。

まるで人形のような綺麗な顔立ちだった。

「もしかして入部希望者?」

彼女の言葉に私は頷いた。

「じゃあそんなとこに突っ立つてないで入つたら?」

人形のような顔とは正反対にツンツンした喋り方。

まるで氷のような印象を『』える。

どうしよう・・・・・。

こんな子と上手くやつていける自信ないなあ。

そんなことを思いつつも「やっぱり帰ります」なんて言えずに[写  
眞部]の部室に入った。

部室は一人きりで気まずかった。

しかし彼女は一向に気にしていない様子で軽く自己紹介をしてきた。

「私は一年A組の南川りお」

「あ、私は一年D組の高水梓乃です」

「ところで写眞もつてる?」

「え?」

「自分の写した写真」

「ああ。持つてます」

私は手帳から写真を取り出すと南川さんに渡した。

小さな白い手が写真をパラパラめくつていぐ。

真剣な眼差しで写真を見ていたかと思うと顔を上げて私を見た。

「写真撮るの好き?」

「好きです」

私のその言葉に南川さんの表情がやわらかくなつた。

そして今度は彼女が撮った写真を見せてもらつた。

空、花、猫。

どれも可愛くて、まるで絵本の一部みたいだつた。

「うわあ・・・・・上手い・・・・・どれも可愛いですね」

私がそう言つと南川さんはきつぱりと言つた。

「だつて中学から撮つてるから」

強気な口調とは反対にその顔は照れているように見えた。

その時。

私は彼女と仲良くなれそうだな、と思つた。

写真部は私を含めて六人だつた。

みんな良い人達で私はすぐに打ち解けることができた。

「今日つて久我先生は部活に来るんだっけ?」

私はそう言つと隣にいる、りおを見た。

「今日は来ないつて言つてたと思つけど」

りおはサンドイッチを食べながら言つた。

写真部に入つて一ヶ月が経つた。

私と南川りおはあつという間に仲良くなつて、昼休みはいつも一緒にお昼を吃るのが日課になつていた。

「そつか。今日は来ないんだ」

私がポツリとそう呟くと。

りおはニヤニヤしながら言つた。

「寂しい？」

「え？ 別に寂しくなんかないよ！」

私は強い口調で言うと缶コーヒーを飲んだ。

しかし慌てて飲んだので、むせてしまつた。

「梓乃は分かりやすいなあ」

「・・・・・なんのことよ」

りおは意地悪っぽく笑つてこう言つた。

「久我先生のこと好きなんでしょう？」

誰があんなパツとしない先生！

だつて三〇過ぎてるんだよ？

結婚だつてしてないみたいだし彼女もいなさそうだし愛想はない  
しズバズバ物事を言つし。

それならB組の爽やかな青山先生とかイケメンで有名の2年A組  
の一条先生とか、そういう先生の方がいいに決まつてゐる。  
私は・・・・・。

廊下を歩いてる久我先生の姿なんて目で追いかけないし  
先生が担当してる国語の授業は昔から好きなだけだし  
部室に先生が来るのなんて待つてないし

屋上に行けばまた来てくれるんじゃないかつて思わないし  
先生が飲んでた缶コーヒーと同じコーヒーを飲み始めたのは偶然で  
私は別に何とも思つてない。

「高水さん。消しゴム貸してー」  
最近。

席替えで鈴木君と隣の席になつたのでよく話しかけられる。

最初は告白を断つたから気まずいなあと思つてたけど、鈴木君は普通に接してきた。

「いいよ」

私は鈴木君に消しゴムを貸した。

ふと視線を感じて前を向いた。

少し離れた席に座つているコリとミユキがこちらを見ていた。

私が彼女達の視線に気づくと慌てて前に向き直つた。

その日の放課後。

教室に忘れ物をしたことに気づいて急いで取りに戻つた。教室から声が聞こえてきたので廊下で足を止めた。

この声はコリとミユキだ。

引き返そうと思い身を翻した時。

耳に一人の会話が流れこんできた。

「最近、鈴木君って梓乃によく話しかけてるよね」

「うん。だから今、梓乃と仲直りすればさあ。コリも鈴木君と仲良くなれるかもよ」

「えー・・・・・仲直りするの?」

「違うよ。仲直りしたふりするだけだつて」

「ああ。なるほどね。それはいいかも」

「それでさー。鈴木君と仲良くなれたら梓乃のことはまた無視さればいいし」

「いいねー。それ賛成」

私は一人の会話にその場から動けなくなつていた。

その時。

誰かが私の肩をポンと優しく叩いた。

顔を上げると、そこにいたのは久我先生だった。

先生は私の横を通り過ぎると教室のドアを勢いよく開けた。

そして一人に向かつてこう言った。

「お前ら、くだらねーこと考えてるんじゃねーよ」

ミコキとコリが怒つて先生に言い返した。

「ちょっと盗み聞きするなんて最低!」

「久我のくせに説教すんじゃねーよ!」

その言葉に自然と体が動いていた。

教室に入るとコリとミコキが驚いて私を見た。

私は一人を見て鼻で笑つてから言つた。

「くだらない」

先生が私の顔を見たので満面の笑みを返した。

先生も優しく微笑んだ。

いつも以上にキラキラして見えたのは氣のせいだ。

瞼に焼きついたままの先生の優しい笑顔。

初めて見たよ、あんな顔。

好き?

そんなわけないじゃない。

だつて先生を好きになつてどうするの?

叶わない恋なんてしてどうするの?

傷つきたくないなんかないよ。

だから早く消えてよ。

私の瞼の裏から消えてよ。

「嫌い!」

「は?」

突然、放たれた、りおの言葉に私は目を丸くした。

「自分に正直じやない奴は大嫌い」

「・・・・・それつて私に言つてる?」

「あんたじやなくて誰だつて言つのよ」

「別に私は久我先生なんて好きじやないから」

「嘘つきも嫌いだ」

りおはやう言つてイチ「ミルクを飲んだ。

私は缶コーヒーを一口飲んだ。

ほんのりした苦味が口に広がる。

久我先生の顔を思い出した。

「好きで悪い？！」

私の言葉にりおは驚いた顔をした。

大きな目がさらに大きくなっている。

そしてニッと笑つてから言つた。

「とにかく協力してやるわ」

私が「ひして今、学校生活を樂しめるのも  
りおと友達になれたのも  
部活で楽しく写真を撮ることができるもの  
先生のおかげなんだろうな。

でも。

そんな照れくさい」と口が裂けても言わないけどね。

模型のような街並み。

雲一つない青い空。

風はやわらかくて。

一月とは思えないほど暖かい。

それでも屋上にいるのは私一人だけだった。

そういえば。

ちょうど一年前も同じよひに会ったつけ。

あの時と違うのは。

いま学校がすごく楽しいことと・・・。

ガチャ。

屋上の重い扉が開いた。

現れたのは濃いグレーのスーツを着た男性。

「久我先生」

「なんだ元気そうだな」

先生は私の前まで歩いてくると驚いたような顔でそう言った。

「元気じゃダメですか」

「いや。さつき南川がお前が屋上で悩んでる、って言つから……」

・

「りおが？ それで来ててくれたんですか？」

「そりゃあ、元受け持ちの生徒をほっておくわけにもいかないしな

あ

「先生らしい……」

「ん？」

「なんでもないです」

私はそう言つと街の方に目をやつた。

先生も同じように町に目をやりながら言つた。

「今のクラスはどうだ？」

「一年生は、りおと同じクラスになれましたし他にも友達ができました」

した

「そうか」

「くだらない事なんて言つたりしない友達です」

「どうか。それなら良かった」

先生はそう言って笑つた。

「もし三年生になつて私が去年みたいに悩んでたら相談に乗つてくれますか？」

「もちろん」

先生は真つ直ぐ前を見たまま続けた。

「俺はずっと高水の味方だ」

やつぱり先生はキラキラと輝いていた。

(こちゅ)

(後書き)

いいまで読んでくれた方、ありがとうございました。

これは2010年1月12日に書いたものです。  
りおは結構、お気に入りのキャラだったりします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2569m/>

---

キラキラと輝く。

2010年10月8日14時30分発行